

経済マンスリー

[原油]

米シェールオイル生産拡大と地政学リスクの綱引きが予想される 2018 年

原油価格（WTI 期近物）は 11 月中、OPEC 協調減産延長への期待が高まる中、中東での地政学的イベントが相次いだことから上昇基調を辿り、同月下旬には 58.95 ドル/バレル（以下同）と 2 年 5 ヶ月ぶりの高値を記録（第 1 図）、11 月 30 日に大方の予想通り OPEC を中心とした協調減産の延長（～2018 年末）が決定された後も WTI は 57 ドル台を維持した。12 月に入り、WTI は一旦 55 ドル台に軟化した。12 月中旬に北海油田でパイプラインが故障のため稼働停止したことを受けて供給懸念が高まり、北海ブレントは 64 ドル台に上昇、つられる形で WTI もやや強含んだ。足元の WTI は 57 ドル台で推移している。

今年の原油価格の動向を振り返ると、年初から概ね 50 ドル近辺で推移した後、年央にかけてリビア、ナイジェリアの増産による供給過剰懸念から弱含む展開もあったものの、秋以降は 50 ドル超えが持続し、下値不安が強かった 2014～16 年に比べれば安定的に推移した年だったといえる。この背景には、OPEC を中心とした協調減産が概ね維持され、需給バランスの改善に寄与したことがある。

一方で、来年を見通した場合、OPEC 減産を所与とした上で焦点となるのは米国シェールオイルの動向だ。同オイルは今年年初から生産拡大を続けており、先行指標とされる石油リグ稼働数についても、年央の原油価格下落を受けた落ち込みは短期に止まり、11 月中旬には価格反転に反応して再び増加に転じつつある。関連指標の「掘削済仕上げ未完了井戸（DUC）」も最高水準に増加しており（第 2 図）、原油価格が上昇すれば DUC からの生産再開に繋がり、シェールオイルの生産拡大ペースへ影響を与えるとみられる。

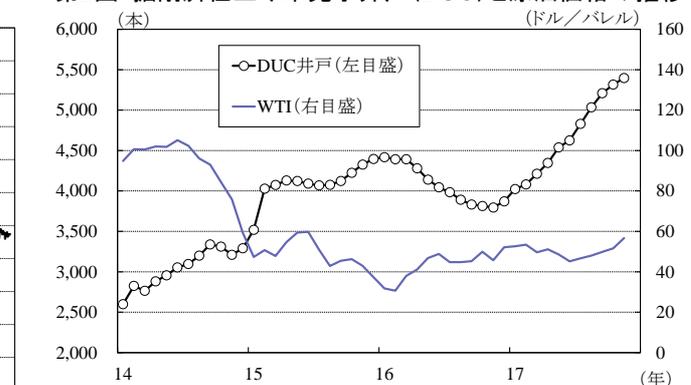
このように米シェールオイル生産拡大が続く当面は、中小規模の供給懸念材料の影響による価格上昇は長期化し辛いとみられる。但し、足元中東情勢が再び緊迫化しており、サウジアラビア国内情勢、イランを取り巻く国際情勢、米国の対中東政策等で相応以上の地政学リスクが発生する可能性には引き続き一定の留意が必要となるだろう。

第1図：原油価格（WTI期近物）の推移



(資料) Bloombergより三菱東京UFJ銀行経済調査室作成

第2図：掘削済仕上げ未完了井戸（DUC）と原油価格の推移



(注) 米国のシェール主要鉱区のうち、石油生産が中心の4鉱区(Bakken、Niobrara、Permian、Eagle Ford)の合計。

(資料) 米エネルギー情報局資料、Bloombergより三菱東京UFJ銀行経済調査室作成

照会先：三菱東京UFJ銀行 経済調査室 篠原 令子 reiko_shinohara@mufg.jp

当資料は情報提供のみを目的として作成されたものであり、金融商品の販売や投資など何らかの行動を勧誘するものではありません。ご利用に関しては、すべてお客様御自身でご判断下さいますよう、宜しく願い申し上げます。当資料は信頼できると思われる情報に基づいて作成されていますが、当室はその正確性を保証するものではありません。内容は予告なしに変更することがありますので、予めご了承下さい。また、当資料は著作物であり、著作権法により保護されております。全文または一部を転載する場合は出所を明記してください。また、当資料全文は、弊行ホームページでもご覧いただけます。